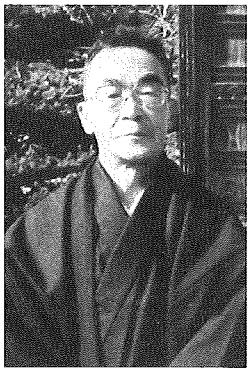


兼川上川第四発電所長、三十七年七月川上川第一発電所長兼南山発電所長兼川上川第五発電所長。

四十三年十月富士町教育委員会委員に就任。

四十六年九月定年退職（九電）

四十九年十月富士町教育委員長に就任。

五十六年二月富士町教育長に就任、同年九月任期満了により退職。五十六年七月佐賀県へき地教育振興会会長に就任、五十八年七月同会長を任期満了により退職。

六十年四月二十九日電力事業及び教育行政に永年に亘って貢献した功績が認められ勲七等青色桐葉章受章の栄誉に輝く。

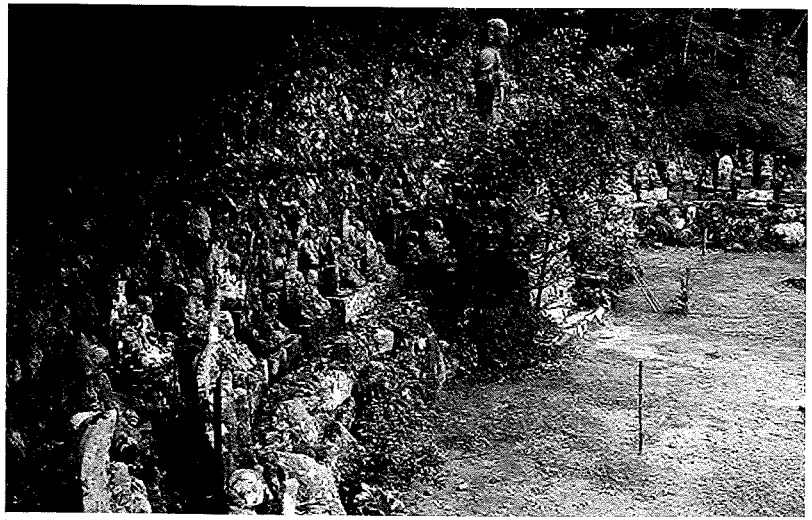
六十一年一月四日富士町監査委員に就任、平成十年一月三日同委員を退職。

平成十一年七月十四日小副川の自宅にて逝去。享年八三歳。

〔お詫びとお断わり〕

富士町の人物については、十分な調査と資料収集ができておらず、これ以外の方についても取り上げるべき人材が多かったことと推察されます。現存者では松本虎夫氏のみ掲載させていただき他の方々は割愛させていただいたことを深くお詫びしたいと思います。

宗教



「白山神社・弘法大師霊場」弘法大師が弘仁12年秋（821）、この地に足をとどめられ宗旨を広められたと言われている。西国一の八十八カ所霊場

一　宗教概説

(一)　神と仏の組み合わせ

京都大学の薗田稔教授は『日本神々の事典』の中で、大体次のようなことを述べられている。

「日本人にとって、神と仏はもっとも身近な宗教である。有史以来、日本のカミを考える場合、ホトケとの交渉を抜きにすることはできない。しかし、そうでありながら両者の個性が同じというわけではない。ほぼ一五〇〇年に近い両者の交渉史でありながら、カミがホトケにもならず、ホトケがカミになりきったわけでもない。なんとも不思議な関係である。

語源的に日本のカミは目に見えない神々、つまり、クム（隠れる）とかクマ（見えない影）という古語の変化からカミとなり、したがって何か隠れてみえないという語意を強く持った神秘的な存在をいう。しかも川下に対する川上、水上のカミにも通じて水源や本源のイメージを持ち、また古典に国魂の神、生魂の神ともあるように、タマ＝霊魂・ムスビ＝産霊、つまり物を生み成す生命霊という意味を合わせ持っている。要するに生活を支える豊かな自然風土にひそむ不可視な霊性をさしてカミといったのである。だから日本の神は、古代ギリシア・ローマの神々のように人間的肉体や容姿や行動する〝見える神々〟ではなく、〝見えない神々〟として、清浄な事物

であれば、人にも樹木にも岩にも柱にも霊として憑り付くことができる。

一般に依代というのは、あくまでも憑依した代物であって、それ自体は神体でも神像でもない。神霊が離れればただの物でしかない。

ところが六世紀前半の欽明天皇の御代に伝来した仏教の金銅仏像はまぎれもなく、カミとは別にその荘厳美をもって日本人の魂を魅了し、如来、諸菩薩などは〝目にみえる神々〟の系譜となった。

飛鳥・奈良時代に神仏が交渉しはじめた当初は一方が〝見えざる神々〟他方が〝見える神々〟ないし〝見せる神々〟という組み合わせとなった。だが平安時代になって神仏習合が進むにつれ、両者の相互影響がたち現われる。壮麗な仏殿に刺激されて神社に社殿が造営されるとともに、仏像をモデルに神像が制作されるようになり、神の依代に替って神の造形が登場する。しかもそうなると、姿のないはずの神が姿のある神となったとたんに、神体そのものは社殿の奥深く秘して隠すことになった。カミは人の眼に触れぬ存在だからである。

ところが同時に仏像のほうも変化がおこった。つまり〝見せる神〟であったホトケが、より広く深く日本に土着化するにつれて、逆にカミの性格を帯びて秘仏化し、仏殿の本尊内陣深く厨子に納められ、普段はその姿をみせなくなった。かくして日本のホトケが日本のカミのように、特定の祭日や縁日に開帳してみせるようになった。こうしてカミの神体化とホトケの秘仏化が相まって、たがいに個性化を失わず、本地仏、垂迹神の世界が生まれたり、神仏のとりあわせという棲み分けをもつ宗教文化が生まれた」と記されている。

本町の場合、カミとホトケの対象となる信仰の社や石祠など多いが、中にはその棲み分けのできないものも多く、今後の研究がまたれるところである。

(二) 宗教（神・仏）の意味

宗教の意義を説くことはむつかしく、本町史の目的とするところではないが、その意味するところを簡略に記しておく。

まず第一は祖先崇拝である。わが国の記紀神話に多くの創造神、自然神、人間神が登場するが、それを大別して天上神、と地上神に分けられる。その内、質、量ともに多いのが地上神であるが、なかでも人間を神に祀った人間神、すなわち祖先神が中心をなしている。人間は死んだのち祖霊をへて神となるという、古くからの神道の信仰である。

仏教の根本教義は、すべての人間は仏になる可能性があるという万人成仏思想（一切衆生悉有仏性）があった。その考えは、神道と共通していたのであろう。

しかしながらそのような流れに対して、一種の逆転現象が神道側によって主張された。それは太陽神を別名アマテラスオオカミとして至高神とし、その翼下にカミとホトケを配置、アマテラスオオカミの血縁上の子孫とされる天皇を、神のごとき存在として聖別するイデオロギーをつくりだした。この考え方はやがて、一個の政治・宗教的な神権体制をつくりあげることに成功、このような動きは中世に種がまかれて、やがて明治維新を契機として一挙に開花することになった。このような宗教意識が近代的政治体制によって、天皇制を確立させてきたのである。

日本列島の神話的伝承の世界は、先祖の変化神としてイメージされる無数の神々やインドから伝来した仏教が、天皇と永遠仏の存在を中軸として、あたかも衛星のような構図を描いて配置されてきたのである。

宗教の第二の意味は「無私」の価値を強調する修養主義である。浄らかな精神状態を追求する「無心」「無私」の考え方が、信仰心や宗教心の基礎をつくるものとされた。神道では「清き明き心」が説かれ、仏教では「心浄ければ一切浄い」という思想が日本人の思想の下地をつくり「自我」の独立より「心」の昇華や浄化をより一層重視するようになった。

仏教の「念仏」や「坐禅」なども、自己の心を清浄にし、「無私」の精神状態に達することを目的としている。

第三の意味は現世的なユートピア思想である。わが国ではるか彼方のパラダイスとして、神道的な「常世国」や仏教的な「浄土」が説かれ、やがて死者が行く世界が、常世の山中にある黄泉国へと変化し、浄土は死者がのぼる霊山へとなり、これが山岳信仰とも融和してきた。

神仏にお祀りする多くの者は、現世利益の「子孫繁栄」「商売繁盛」など幸運を授ける神々への信仰が盛んになっている。特に七福神信仰などは中世から近世にかけて入って来た独自の福神信仰から生まれたものである。

この三つの視点が、宗教活動にみるある程度の尺度となり、社会生活を考える参考となる。

しかし、現代はキリスト教の外、多くの宗教集団が広範な宗教活動をしており、これらの考え方も複雑化している。本史では神仏のみの意義を略記した。なお、本稿を記すについて、国際日本文化研究センター教授山折哲雄の『日本人と宗教』の本を参考させていただいた。

(三) 富士町の社寺

富士町の神社や寺院、民間信仰に属する路傍の神々（観音、地蔵、経典供養など）がいつころから祀られたかは不明だが、長い間神仏習合の時代が続いてきた。これは仏教伝来した六世紀中ごろ、すでに律宗系の山岳信仰に顕著にみられ、八世紀初頭には各地に神宮寺が建立され、神前読経が行われた。中世には仏教の教義による神道思想が構築され、一般神社でも僧侶が別当として祭祀や運営管理を行っていた。

しかし江戸末期、国学や儒学が盛んになると排仏的風潮が高まり、幕府の政策で神仏分離が行われ、神宮寺を廃し仏教色を取払った。そして神社から仏像を撤去し、菩薩や権現号を社名からはずした。

山深い本町の社寺では神宮寺を持つような大きな社寺もなく、廃仏毀釈や寺院の打ち壊しのようなこともなかったようである。それは明治二十二年、市町村制成立後、佐賀県から市町村に宗教調査を命じたことによってわかる。

これに応じて、小関村、南山村、北山村の各村長名で『存置社寺調書』が県知事宛に提出されているので、左に記してみる。これは神社と寺院、神仏習合の社も含まれていて、その住み分けがまだ判然としていないものも多い。

存置社寺調書

佐賀郡小関村

大字	字	地番	社寺名称	社格又ハ有住無住
小副川	辻	壬二百六十七番	天満宮	村社
下小副川	山後	二百十九番	住吉大明神	雑社
仝	下ノ原	六百八十番	八幡社	仝
仝	鶴	壬三百六十二番	九郎神社	仝
仝	下ノ原	七百三十五番	與賀大明神	仝
	大ノ原	四千百九十八番	八代社	仝
須田	小川内	三千七百六十二番	簑島神社	仝
小副川	高原	三千五百九十三番	彦山権現社	仝
仝	鳥居	三千百六十七番	白鬚社	仝
仝	廻森	二千七百四十九番	天満社	仝
仝	菅谷	二千八百六十八番	中野明神	仝
仝	矢落	二千百八十六番	八幡神	仝
仝	仝	二千八番	九郎神	仝
仝	中鶴	二千二百四十番	厳島神社	仝
仝	竹	二千六百二十七番	春日神社	仝
仝	雨降	五千五百八十二番	北野神社	仝
仝	岩佐古	五千四百九十四番	天満社	仝
仝	屋敷	四千九百七十三番	猿若大明神	仝

大字	字	地番	社寺名称	社格又ハ有住無住
小副川	雨降	五千八百四番	矢房神	雑社
仝	山中	六千八十八番	池神社	仝
仝	中峠	五千九百七十八番	子安神社	仝
仝	山中	又六千八十四番	地主神	仝
仝	高原	三千四百一番	妙傳庵	有住
仝	古村	壬二百九十二番	光久院	仝
仝	卯土	百八十五番	不動尊	無住
仝	大佐古	百十番	薬師	仝
仝	古村	壬二百九十番	阿弥陀	仝
仝	古村	壬三百一番	地蔵	仝
仝	鮎ノ瀬	千六百六十三番	地蔵	仝
仝	野峠	千八百十六番	観音	仝
仝	大ノ原	四千百九十九番	観音	仝
仝	仝	四千百五十七番	瀧観音	仝
仝	矢落	二千十七番	観音	仝
仝	鳥居	三千三百八十三番	地蔵	仝
仝	小川内	三千七百九十番	観音	仝
仝	岩佐古	五千四百二十四番	薬師	仝
仝	雨降	五千五百二十五番	阿弥陀	仝
仝	山中	六千六十二番	観音	仝

大字	字	地番	社寺名称	社格又ハ有住無住
関屋	白石	壬二百五十二番	大仙寺	有住
仝	仝	壬二百十七番	春日大明神	雑社
仝	天神	千六十六番	天満宮	仝
仝	仝	千七十五番	天満宮下ノ宮	仝
仝	下ノ原	百九十番	諏訪大明神	雑社
仝	仝	五十三番第二	矢房社	仝
仝	仝	百七十八番	観音	無住
仝	仝	百十四番	辨財天	仝
仝	山口	六百六十八番	天満宮	雑社
仝	山口	六百十五番	観音	仝
仝	仝	二千百七十六番	祇園社	仝
仝	長山	二千五百八十三番	観音	無住
仝	伏部	千九百四十五番	白山権現	村社
仝	山口	二千百八番	春日大明神	雑社
仝	伏部	千八百二十四番	地蔵	無住
仝	仝	千九百七番	阿弥陀	仝
仝	仝	千九百三十番	山神	雑社
仝	山口	二千百十四番	九郎神社	仝
仝	伏部	千九百四十二番	阿弥陀	無住
仝	南園	三千八番	荘厳院	有住

大字	字	地番	社寺名称	社格又ハ有住無住
関屋	芳牟田	二千九百九十八番	楠公社	雑社
仝	南園	三千三十番	観音	無住
仝	中島	三千六百番	観音	仝
仝	立石	二千八百三番	山神	雑社
仝	榎木	四千七百八十八番	泉神	仝
仝	東岳	四千九百六十二番	白山権現	仝
仝	仝	四千九百三十七番	七郎社	仝
仝	仝	四千九百九番	観音	無住
仝	鶴	四千六百十二番	毘沙門	仝
仝	仝	四千六百三十三番	八龍社	雑社
仝	仝	四千六百七十九番	宗源院	有住
仝	仝	四千四百六十九番	豊臣社	雑社

右将来存置ノ見込ニ候也

佐賀郡小関村長

明治廿三年五月二日　藤田　尉平　印

佐賀縣知事　樺山　資雄殿

存置社寺調書

小城郡南山村

大字	字	地番	社寺名称	社格又ハ有住無住
古湯	本村	九百六十番	淀姫神社	村社
全	全	全	諏訪神社	無格社
全	全	七百二十九番	彦山社	無格社
全	三嵜原	二千九百一番	天満宮	無格社
全	本村		振湯神社	無格社
全	全	七百五十三番	太梅院	無住
全	三崎原	二千六百十八番	竜泉寺	無住
全	立石	千二百六十四番	鎌玉神社	無格社
全	櫻		八郎神社	無格社
全	全	六百八十番	正法寺	無住
芭木	持万	二百三十九番	諏訪神社	無格社
全	尾崎	千六十三番	床浦神社	無格社
全	尾崎	千六十三番	東光寺	無住
市川	綿打	千五百五番	諏訪神社	村社
全	茱萸	二千五百七十五番	若宮神社	無格社
全	全	二千五百五十五番	天神社	無格社
全	葛尾		九郎神社	無格社
全	全		矢房神社	無格社

大字	字	地番	社寺名称	社格又ハ有住無住
市川	茱萸	二千五百七十二番	西福寺	有住
杉山	黒豆	五十九番	白石神社	無格社
全	全		山神社	無格社
全	全		厳島社	無格社
全	川原		老上神社	無格社
全	黒豆	四十番	八坂神社	無格社
全	本村	千八十五番	玉秀院	無住
畑瀬	前田	七百二十二番	畑瀬神社	無格社
全	中田	八百三番	天神社	無格社
全	上ノ山	四百三十八番	八幡社	無格社
全	全	二百九十六番	荒人神社	無格社
全	全	二百七十八番	九郎神社	無格社
全	全	四百二十番	東泉寺	有住
上熊川	園田	千三百九十七番	猿若神社	村社
全	湯ノ原		熊泉神社	無格社
全	平	二千二百八十四番	天満社	無格社
全	大神	千五百七十二番	熊野神社	無格社
全	湯ノ原	二百九十九番	天満社	無格社
全	神前	二千四百七十二番	住吉社	無格社
全	櫃石	三千六十六番	荒人社	無格社

大字	字	地番	社寺名称	社格又ハ有住無住
内野	道辻	六十番	七郎社	無格社
全	井手神	四百二十九番	井手神社	無格社
全	水頭	二百三十番	西光寺	有住
八反原	一本椎	三百三十八番	熊野神社	村社
全	全	三百三十番	八尾神社	無格社
下熊川	柳篭		松尾神社	無格社
全	一本松	千六十四番	七郎神社	無格社
全	全	千八十六番	矢白神社	全
全	深江		乙宮神社北	全
全	全	百五十六番	乙宮神社南	全
上熊川	湯ノ原	千五十七番	薬師如来	全

大字	字	地番	社寺名称	社格又ハ有住無住
上熊川	折立		観世音	無格社
全	天神	二千二百三十一番	観世音	全
全	平	二千二百七十番	薬師如来	全
全	平	三百五十七番	観世音	全
下熊川	堤ノ原		観世音	全

右将来存置ノ見込ニ候也

小城郡南山村長

明治廿三年六月八日　川浪　瑞雄 印

佐賀縣知事　樺山　資雄殿

仏教関係は寺院を除く標示が各村で同じでなく、観世音であったり、観音であったり、その扱いも無住、無格社、雑社とまちまちである。これは薬師、薬師如来なども同じである。

江戸時代、民衆の熱狂的信仰に支えられた霊場信仰、山岳信仰、山伏が活躍した溜り場などは、廃仏毀釈の影響で、この調査の段階でかなり淘汰されていることが考えられる。

存置社寺調書

小城郡北山村

大字	字	地番	社寺名称	社格又ハ有住無住
中原	中原	三百五十五番	正念寺	有住
仝	仝	三百四十五番	矢房社	雑社
仝	仝	三百六十貳番	九郎社	仝
仝	仝	三百六十番	観世音	仝
大野	壱本松	七百四十六番	春日社	村社
仝	仝	七百七十三番	厳島神社	雑社
仝	仝	八百六十九番	厳島神社	仝
仝	仝	八百九十六番	九郎社	雑社
仝	仝	九百四十七番	矢房社	雑社
仝	仝	九百九十六番	天満社	仝
仝	仝	九百拾六番	金福寺	有住
古場	松葉	千七百三十番	浄覺寺	有住
仝	大前田	四百八十五番	文珠	雑社
仝	大前田	貳拾壱番	天神社	仝
仝	大前田	四百廿四番	地藏	仝
仝	北向	千百九十二番	観世音	仝
仝	北向	千百九十八番	地藏	仝
仝	松葉	千五百九十三番	観世音	仝

大字	字	地番	社寺名称	社格又ハ有住無住
古場	松葉	千五百九十四番	厳島神社	雑社
仝	仝	千六百〇七番	荒人神社	仝
仝	仝	千七百七十八番	女性社	仝
仝	仝	千八百三十四番	中山神社	仝
仝	仝	千八百六十八番	中山神社	仝
藤瀬	本村	七拾九番イ	光妙寺	無住
仝	峠	六百〇四番	藤瀬神社	雑社
仝	本村	五拾六番	大神宮	仝
仝	仝	二百四十三番	矢房社	仝
仝	仝	百九十一番	天神社	仝
仝	中村	八百八十二番	森木	仝
仝	仝	八百廿壱番	観世音	仝
仝	中村	千拾壱番イ	天神社	仝
上合瀬	浦	四百五拾番	九郎社	仝
仝	仝	六百七拾九番	厳島神社	仝
仝	布巻	八百廿五番	山神社	仝
下合瀬	樋口	六百五十四番	鏡神社	村社
仝	仝	五百五十二番	厳島神社	雑社
仝	山神	八百五十七番	山神社	仝
仝	山神	八百五十番	山神社	仝
樋口	仝	六百貳拾三番	八坂社	仝

大字	字	地番	社寺名称	社格又ハ有住無住
下合瀬	落合	百三拾三番	天神社	雑社
仝	樋口	八百八拾壱番	山神社	仝
仝	山神	八百五拾番	観世音	仝
仝	落合	百三拾五番	観世音	仝
仝	樋口	六百拾四番	萬福寺	無住
仝	落合	七拾五番イ	正善寺	有住
上無津呂	仝	二千八百四拾四番	淀姫神社	郷社
仝	堅田	三千四百壱番	七郎社	雑社
仝	大東	三千百九十九番	七郎社	仝
仝	若松	六拾貳番	若宮社	仝
仝	仝	二百拾九番	荒人社	仝
仝	仝	二百三十五番	一ノ宮	仝
仝	北ノ寄	二千三百四十五番	天神社	仝
仝	若松	四百〇壱番	七郎社	仝
仝	山神	千七百八十三番	山神社	仝
仝	下浦	千拾六番	下浦社	仝
仝	櫻	千四百六十番イ	養父社	仝
仝	羽金	二千九百〇貳番	寶泉寺	有住
仝	櫻	千四百四十二番	西光寺	有住
下無津呂	二本松	四百番	乳母神社	仝

大字	字	地番	社寺名称	社格又ハ有住無住
下無津呂	壱本松	八百拾三番	八幡社	雑社
仝	仝	五百六十五番	天神社	仝
仝	四本松	千八百五十九番	藤神社	仝
仝	壱本杉	五百九十番	天福寺	有住
麻那古	二本松	五百三十九番	厳島神社	雑社
仝	仝	六百三十八番	峠社	仝
仝	仝	六百八十番	春日社	村社
仝	仝	七百五十番	養父社	雑社
仝	三本松	八百八十五番	新田社	仝
仝	野々川	千百九十三番	山神社	仝
仝	三本松	八百三十八番	観世音	仝
仝	二本松	四百五十七番	圓徳寺	有住
仝	山口	貳千〇貳番	大光寺	有住
栗並	大道	壱番	七郎社	雑社
仝	仝	五百九十三番	子安社	仝
仝	山神	八百九十番	山神社	仝
仝	八龍	千四百六十九番	八龍社	仝
仝	九郎	二千〇廿三番	九郎社	仝
仝	仝	二千三百廿五番	権現社	仝
仝	仝	三千九十九番	観世音	仝

大字	字	地番	社寺名称	社格又ハ有住無住
栗並	山神	九百五十二番	三光寺	有住
大串	二本松	七百五十七番	光照寺	有住
仝	仝	七百八十九番	薬王寺	無住
仝	一本松	七十五番	天神社	雑社
仝	仝	四百廿三番	七郎社	仝
仝	仝	五百七十五番	九郎社	仝
仝	仝	七百〇壹番	大串社	仝
仝	三本松	七百廿九番	旱馬社	仝
仝	壱本杉	千二百拾三番	七郎社	仝

このうち郷社は一社。北山村上無津呂の淀姫神社、村社は九社。南山村が古湯の淀姫神社、市川の諏訪神社、上熊川の猿若神社、八反原の熊野神社。北山村は大野の春日神社、下合瀬の鏡神社、麻那古の春日神社。小関村は小副川の天満宮、関屋の白山権現である。

こうした社格は明治四年五月十四日、官社以下定額及神官職員規制を、同七月四日これに付帯する郷社定則を公布した。のち村社は独立した扱いにし、その下に無格社（社格をもたない公認の神社）が設けられた。社格のある神社には祈年、新嘗（にいなめ）、例祭の三大祭には公的な神撰幣帛料が公費から供進された。しかし終戦を迎え、昭和二十一年二月二日勅令第七一号をもって社格は廃止された。

大字	字	地番	社寺名称	社格又ハ有住無住
大串	一本黒木	千三百九十五番	権現社	雑社
仝	仝	千四百番	九郎社	仝

右将来存置ノ見込ニ候也

小城郡北山村長

明治廿三年五月　馬場　崎傳　印

佐賀縣知事　樺山　資雄殿

二　神　道

(一)　神道の概要

古代の日本人の信仰は、自然、人事を問わず、霊力をもつもの、人知ではかりしれないものを神とする信仰があり、したがって神は唯一絶対の神ではなく八百万（やおよろず）神として現われた。その中には人間生活に恩恵を保護する「ニギタマ」の神もあれば、逆に災厄をもたらす「アラタマ」の神もあった。

村人はニギタマに生活集団の加護を祈り、アラタマを鎮めることを願って祭祀を行ってきた。これらの信仰は個人個人のものではなく、家なり、同族なり、地域集団にとっての神であった。したがって生まれてきたとき、運命的に自分の頼るべき神は決り、個人で信仰を選ぶことはできなかった。季節季節に行われる祭祀は、集団生活をする仲間一同の豊かな繁栄を祈願するものであった。

神は家族、同族、地域集団の意識を一つに結集する機能を持っていた。権力を握る支配者が、神信仰を支配の具にしたのは、ここに着目したからである。

神の常住する神社の建立によって、神社の権威を高めるため、祭神として神話や歴史を背景とする固有の神名をもつ神々を勧請して祀る風が起った。また祖先神や氏神あるいは産土（うぶすな）神を神社に祀り、集団社会があるところに神社があるようになった。